



# 2007 年度 政治外交史 I 期末試験講評

今回の問題文は下記の通りでした。

1920 年代の日米関係の特徴について、その前後の時期（1910 年代／1930 年代）と比較しながら、説明しなさい。なお、説明に際しては、経済的側面にも言及すること。

※採点に際しては「論旨の明快さ」や「論理性」を重視するが、「答案が適切に構成されているか」「段落分けは適当か」「誤字が少ないか」なども、評価の対象とする。

※答案の余白部分（学籍番号欄の周辺や、裏面の空いているスペースなど）を、「論点出し」や「答案構成」作業に用いても構わない。なお答案提出前に、それらのメモを消す必要はない（消しても構わない）。

## 1. 答案の作成方法について

最初に、どのような手順で答案を作成すべきだったか、私が補講で教授した手順に即して、見てゆきます。

### ①問題文を読み、出題者の意図を理解する。

I. 今回の出題の本質は「1920 年代の日米関係の特徴について説明しなさい」です。それ以外は「修飾」にすぎません。

したがって、まず、1920 年代の日米関係の特徴について書いていない答案は 0 点です。また、「1910 年代の日米関係」「1920 年代の日米関係」「1930 年代の日米関係」を、それぞれ同じような調子で並べて書いた答案は、出題の意図が汲み取れていないものと判断し、大きく減点しました。

II. また解答に際しては、「その前後の時期（1910 年代／1930 年代）と比較すること」「経済的側面にも言及すること」が、条件として必要です。この条件を充さず、たとえば 1920 年代の日米関係の特徴のみを書いた答案も、大幅な減点対象です。

III. さらに、「経済的側面にも」とありますので、当然、経済的側面だけ書いた答案は、題意を満たしていないこととなります。これも大きく減点しました。

### ②必要と思われる論点を（紙に）書き出す。

I. 答案において、かならず言及すべき論点としては

a. 1920 年代の日米関係の特徴（経済面以外）について

b. 1920 年代の日米関係の特徴（経済面）について

c. これらが 1910 年代や 1930 年代のそれと、どのように異り、どのように類似するか（比較）

の 3 つです。レジュメでいうと、65～67 ページあたりを中心とすれば、十分に合格答案となり、さらにその前後（ワシントン体制や幣原・田中外交のあたり）からも論点をもってくれば、完璧でしょう。

II. 答案用紙の裏や端の方に、メモが残っていた答案については、一応チェックをしました。このメモが良くできているものについては、とくに裁量点を附加した例もあります。

### ③答案全体の論理構成を組み立てる。

この点については、きちんと段落わけができているか、全体としてまとまりのある構成となっているか、といった面からチェックしました。思い付くままにダラダラと書き並べたような答案は、当然ながら減点しています。

### ④実際に答案を書く。

（省略）

⑤きちんと読み直し、おかしな所がないかチェックする。

- I. この作業をきちんとすれば、誤字や脱字などはかなり減るはずなのですが。誤字を理由に、減点した答案も少くありませんでした。大変もったいない話です。
- II. また、日本語として意味が通っていない答案も、複数枚見つかりました。これも一度、最初から読み直してみれば、すぐに気づくはずなのですが。

あくまで推測ですが、2回の補講にきちんと出席し（あるいは自分で録音などをチェックし）、まじめに努力した学生は、それなりの答案が書けていたようです。しかし、これらの努力を怠った（あるいは努力の形跡がまったく見られない）学生については、点数のつけようがない、悲惨な答案が数多く見られました。

## 2. 期末試験の採点について

①採点に際しては、最初に下記の諸点に留意しつつ、大まかなチェックを行いました。

- I. 設問に対して、きちんと解答をしているか。  
→問題文をきちんと読んでいない答案は、大きく減点しています。また、1920年代の日米関係について、世界大恐慌（1929年10月）についてだけ、書いてある答案もかなりありました。これも題意を満たしているとはいえませんので、大きく減点しています。
- II. 論旨の明快さや論理性が、大学生にふさわしい水準に達しているか。  
→一読して「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案は、大きく減点しました。また、段落分けがきちんとなされず、ダラダラと改行もなく書き続けている答案も、減点の対象としました。心当りのある人は、もう一度補講の内容を思いだし、「答案構成（設計図）」をきちんとしてから、答案を書き始めるようにして下さい。

②つぎに、以下のようなポイントをきちんと押えているか、チェックしました。

- I. 必要な論点が揃っているか。
  - a. 1920年代の日米関係の特徴（経済面以外）について
  - b. 1920年代の日米関係の特徴（経済面）について
  - c. これらが1910年代や1930年代のそれと、どのように異り、どのように類似するか（比較）本来ならば、この3つがそろっていなければ不合格なわけですが、それでは合格するひとが、ほとんど居なくなってしまいます。そこで、この科目が新入生を対象としていることなども考慮して、かなり甘めに採点しました。

II. 解答の分量が不足していないか。反対に無駄な記述が含まれていないか。

試験時間は80分あるわけですから、それなりに分量が書かれていないと、全体としての評価は下がります。また反対に、出題と全く無関係の事柄がいろいろ書かれている場合も、やはり評価は下がります。「書いて置けば損にはなるまい」と考えたのかもしれませんが、結局「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案に近くなるだけですので、全体としての印象は悪くなるだけです。「求められる知識を、論理的に、かつ過不足なく書く」ことを心掛けて下さい。

ちなみに書き終わっていない「未完結の答案」も、採点の対象にはしましたが、それなりに減点してあります。

III. 「基本的なミス」を犯していないか。

→たとえば、1920年代に日本に原爆が投下されたなどという「基本的な誤り」を犯している答案は、その誤りに応じて、大きく減点しました。

③最後に、誤字脱字など、形式的なミスについてチェックをし、あまりに酷いものについては減点しました。  
こう書くとは必ず、「読めればいいのではないですか」といいます学生が出てきますが、では同じように、誤字脱字だらけの履歴書やエントリーシートを、就職活動で提出したら、どういう結果になるかを考えてください。試験中は辞書を引けないので、ある程度までは大目に見ていますが、あまりに酷いものは、減点の対象としています。

④その後、加減点や裁量点なども合算して、最終的な成績を算出しました。答案がボロボロでも、加減点のおかげでA評価になった人がいる一方、答案そのものは素晴らしいのに、加減点によりCになってしまった人もいます。したがって、成績表にAがついていたとしても慢心せず、またCだったとしてもがっかりせず、今後もよい答案が書けるよう、精進して下さい。

なお、自分の答案について、より詳しいコメントや指導を希望するひとは、後期に入って、成績が正式に発表されてから連絡をもらえれば、随時対応します。事前にメールで連絡を入れてもらえるとありがたいです。ただし、成績の変更（確認）を要求する者は、かならず別途「成績確認制度」の方を利用するようにしてください。

### 3. 成績分布について

#### ①科目登録者全体における成績分布

A : 21.7%   B : 16.4%   C : 18.0%   X : 12.7%   無資格・欠席 : 31.3%

#### ②期末試験受験者における成績分布

A : 31.5%   B : 23.9%   C : 26.1%   X : 18.5%